

平成二十七年 度

国

語

(60 分 120 点)

注 意

- 一 試験開始のチャイムが鳴るまで、表紙を開いてはいけません。
- 二 試験開始のチャイムが鳴ったら、まず解答用紙の決められた所に受験番号を書き、問題のページ数をたしかめてから始めなさい。
- 三 問題は十七ページまであります。ページの不足や乱れがあったら、だまって手をあげなさい。
- 四 印刷のはつきりしていない所があったら、だまって手をあげなさい。
- 五 試験終了のチャイムが鳴ったら、すぐ鉛筆を置き、解答用紙を、表を上にして問題用紙の上に置きなさい。

(問題は次のページから始まります。)

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

「アスパラ」は、グリーンアスパラガスが好きなとこの冬二（小学校二年生）に「わたし」がつけたあだ名である。おじいちゃんのお葬式で、「わたし」はアスパラと再会したが、アスパラの離婚した両親は姿を見せなかった。

おじいちゃんが生きていたころ、ママと一緒に遊びに行くと、アスパラが一人で庭の隅に穴を掘っていたことがある。
「なに、してるの？」

近づいてから、わたしはたずねた。穴の深さは二十センチくらいだった。

「宝物を探してる」とアスパラは答えた。

「どういう宝物？」

「そりゃわからないよ。掘ってみなきゃ」

アスパラはスコップで土を掘りつづけた。そこに何か埋められていることをカクシン¹しているみたい掘り方だった。

「だれが埋めたんだろ」

わたしはそばで穴の底を見つめていた。穴は、ただ穴だった。石ころが二つ三つ見えていた。アスパラは答えなかった。

「チロが掘った穴ぐらいになった」とアスパラは言った。

「チロって？」

「犬」

「飼ってたの？」

「うん」

アスパラは掘る手を休めずに言った。

ふうんと思った。アスパラが自分のことを話すのを聞くのははじめてだと思った。それまで、親子三人で暮らしていた時のことや、前に住んでいた家のことなどをアスパラが話すのを聞いたことがなかった。前はどんな小学校に行っていたのか、その学校には友だちはいたのか、その友だちとはどんな言葉でお別れを言ったのか。アスパラは何も言わない。

アスパラのお母さんは、アスパラと一緒にこの家にもどってきたあとしばらく、おじいちゃんとおばあちゃんと四人で暮らしていたのに、ある日、ふいどこかへ行ってしまったのだ。アスパラを残したまま。行先も言わずに。そのまま帰ってこなかった。

①大人の考えていることはわからない、とわたしは思う。それが入り組んだ事情なのか、なんでもない気まぐれなのか、それもわからない。わたし、もう五年生なのに、わからなくてくやしい。

おばさんはアスパラがじゃまだったのか、と考える。自分の息子なのに、アスパラのことが気にならないのか、とも考える。親って、何？ と考える。

出ていったお母さんのことをどう思っているのか、アスパラに聞いてみたい気もするけれど、でも、わたしは聞けない。

ママは「昔は、あんな子じゃなかったんだけど」と、おばさんのことをパパに話していた。それはどういうこと、とわたしは考える。人間は、いつのまにか性格が変わってしまうんだろうか。前は思いやりがあったのに、時間がたつと、思いやりはその人の中から消えてしまうんだろうか。ああ、わかんない。大人の考えていることがわからない。

アスパラは穴を掘りつづけた。しまいには穴の中におりて掘っていた。アスパラの膝ぐらいまでの深さになったとき、おじいちゃんが庭に出てきた。

「冬。なんか出てきたか？」

おじいちゃんのはのんびりした声でたずねた。

「まだだよ」

穴の中からアスパラは答えた。

「そのくらいでやめなよ。そこには宝なんてなかったんだろ。もう出ておいで」

おじいちゃんは、やはりなんでもないように言った。

アスパラはすごくなごりおしそうな顔で穴から出てきた。そして、穴のふちに立って、自分の掘った穴を

1 と眺めてい

た。おじいちゃんはそのあとで、その穴を雑草を埋める穴に使った。大人の考えていることは、ほんとわからない。子どもって、半分、大人にだまされてるのかな。

でも、アスパラはそんなことも気にしていないみたいだった。かといって、べつの穴を新しく掘って、宝を探そうともしなかった。アスパラはわたしみたいに、すんでしまったことをあれこれ考えて、人を疑ったり、憎んだり、いじけたりもしないみたいだった。

四十九日の法事（人の死後四十九日目にう仏教の儀式（ぎしき））がすんで一週間すると夏休みになった。ママの車で、わたしはおばあちゃんの家に向かう。

玄関を入ると、家にはおいしそうな匂いがただよっていた。

「アスパラ。おみやげ」

わたしは長方形のミツペイ容器を台所のテーブルに置いた。中にはグリーンアスパラガスがぎっしり詰まっている。わたしが「そうしようよ」と、八百屋でママにしつこく頼んで、五本ずつ束ねてあったグリーンアスパラガスを十束買ってもらったのだ。それを切らずにゆでて、詰めたのだ。

アスパラは台所で腕まくりした手をコナだらけにしていた。

手を洗ってからアスパラは容器のふたをあげ、中身をたしかめた。

「や、や、や、や」

アスパラはおじさんみたいな声を出した。でも顔がぱつと輝いたのが、わたしにはわかった。よかった、とわたしは思った。わたしもアスパラも子どもで、子どもはわかりやすく、それは子どものいいところだ、とわたしは思った。

アスパラが作っていたのはコロッケだった。

おばあちゃんはコンロの前で、鍋のてんぶら油の上に手を「A」温度をたしかめている。

「もう油に入れていい？」アスパラがたずねる。

「オッケ」

おばあちゃんが答えている。おばあちゃん、なんだか楽しそうだ。

アスパラが丸めたコロッケを油の中に入れる。ものすごく真剣な顔をしている。一個入れると、後ろに飛びのく。油がぴちぴちとはねる。

「だいじょうぶだってば」

おばあちゃんはわらっている。

アスパラはコロッケを一つ入れては飛びのく、を繰り返す、そのあとはテーブルの椅子の上に立って、離れた場所から鍋の中を観察していた。

「ほうら、もう、こんがりきつね色になっちゃった」

おばあちゃんはどうも無邪気な声になって、得意げに油からコロッケを引きあげている。

「ねえ、これはばくのコロッケ？ それとも、おばあちゃんのコロッケ？」とアスパラがたずねている。

「冬ちゃんのコロッケです。冬コロッケ」

おばあちゃんが言うと、アスパラはすぐうれしそうにわらった。

持ってきたアスパラはコロッケのツけ合わせにびったりだった。

アスパラはどんな場所にもすうつとなじんじゃうんだな、とわたしは思う。だれとでも、なじむ。なんか、ずっと前からの友だ

ちみたいに。わたしも、アスパラといるとアスパラの気もちが全部わかるような気がする。アスパラとわたしは大の仲良しなんだという気もちになる。アスパラが不満を言ったり、文句を言ったりするのをわたしは聞いたことがない。だれかの言葉に、いつも「うん、うん」うなずいている。

「アスパラのコロツケ、めっちゃおいしいよ」

わたしが言うと、アスパラはママの顔とおばあちゃんの顔を見て、それから「うん、うん」と、うれしそうにわらった。

ママが電話で話している相手はおばあちゃんのようなようだ。

「それでケツキヨク、あの子、子猫をどうしたの？」とママが聞いている。

おばあちゃんの言葉に耳を「B」「それから「そう」とうなずいている。アスパラの話をしているらしい。

わたしはママに「アスパラをうちの子にして」と頼んだ。アスパラがうちの子になったら、と考える。そしたら、わたし、すごくいいお姉さんになる自信がある。アスパラも家族が四人になると、きっともうさみしくなくなるだろうし。

ママは「そうねえ」と、あいまいな返事をした。

「ダメな理由は、何？」わたしは聞いた。

「そんなに簡単なことじゃないのよ」

ママは、ね、わかるでしょ、という顔をわたしに向けた。

この場合の「かんたん」って、どういう意味なのか、とわたしは考える。「簡単な算数の問題」というときの「かんたん」じゃないことはわかる。いろいろフクザツな事情があるってこと？　じゃあ、それは何？　だれか反対する人がいるってことだろうか。アスパラの両親はどっかへ行っちゃって反対どころじゃないし、おばあちゃんはきつと賛成してくれるはずだし。じゃ、だれ？　市役所の人？　まさかね。

ほんとうの理由をママはわたしに言いたくないだけなんだ、と思う。それはわたしが子どもだから？

わたし、ママの考えていることならわかってるんだよ、とママに言いたい。でも言わない。けんかになっちゃうから。

パパはアスパラのことをどう思ってるんだろう。パパは、ほんとには娘より息子がほしかったんじゃないだろうか。でも、そんなことは、いまはもうパパに聞けない。小五にもなって、そんなことは聞けない。

ママがジュウキを置いた。

わたしが見つめているのに気づいて、ママは首をかしげてから、「あのね」と言った。それから、ちょっとわらった。

「子猫をひろったんだって、アスパラくん」とママは言った。

でも、おばあちゃんは、子猫は飼えないとアスパラに言い、ほかの人にもらってもらいなさい、と言いつ渡したのだそう。アスパラは猫を抱えて出ていき、それっきり、暗くなっても家に帰ってこなかった。おばあちゃんは

3 アスパラをさがしに出かけた。でも、どこに行ってしまったのか、近くの公園にも、学校にも、駅のまわりにも、アスパラはいなかった。疲れはてておばあちゃんが家に帰ると、アスパラは先にもどっていたのだという。

「で、猫は？」とわたしはママに聞いた。

ママはわらった。「アスパラくん、一軒一軒の家をたずねては、『この猫を飼ってくれませんか』って、おねがいして歩いたんだって。何軒も何軒もそうやってたずねて歩いて、どの家でも断られて、困りはてて電柱の下にしゃがんでいたら、自転車の乗った女の子が通りかかって、

4 子猫をもらってくれたんだって」

アスパラがガイトウの下にしゃがんでいる姿が目につく。その自転車の女の子が自分じゃなくて、それがとても残念な気がする。

「やさしいのね、アスパラくん。感心しちゃった」と、ママはまるでいいお話を聞いて胸が熱くなりました、みたいな言い方をした。

⑥ 悲しい、とわたしは思った。お母さんにもお父さんにも見捨てられたアスパラは子猫を見捨てることができなくて、知らない家を一軒一軒たずね歩いていったんだ。そう思うと、胸がざわざわして、それから胸の、ホネとほねのあいだがぎゅうつと痛くなっ

た。残酷だよ、とわたしは思った。ざんこく、という言葉が頭の中でちかちか点滅して、頭がちくちくしてきて、目の中が熱くなって、涙がぼろぼろ流れた。

「あら、どうしたの」とママは言った。

わたしは泣くのをやめられない。いまずぐ走ってアスパラのところへ行きたいと思った。行つて、「アスパラ、もうだいじょうぶだよ、わたしが来たからね」って言つてあげたい。アスパラを守るのは、やっぱりわたししかない。そう思うと、涙は止まらなくなった。

「アスパラがかわいそうだよ」

泣きながら、わたしは言つた。でも言つてしまつてから、かわいそう、なんて言い方をすると、アスパラがもっとかわいそうになる、と気がついた。

「おばあちゃんはアスパラくんの世話だけでも大変だつてことは、利香にだつてわかるでしょ。猫の世話まではできないわよ。わかるでしょう？」

わたしは、子どもってなんて不幸なんだろう、と思う。猫一匹飼うことさえ自分で決めることができないんだから。そう考えていたら、しだいに腹がたつてきて、そしたら涙は止まつていた。

パパに「冬くんをさそつてドライブにでも行こうか」と言われて、車でアスパラを迎えに行つた。

電話で「ドライブに行こうよ」とアスパラに言つと、「ドライブって？」と、アスパラはドライブの意味さえ知らないみたいだつた。アスパラは親にドライブに連れていつてもらつたこともないのかと、アスパラに同情する気もちがわきかけたけれど、わたしはその落とし穴には落ちないように気をつけた。⑦ 気もちの落とし穴に。すぐに泣いたり、だれかをかわいそうに思うのは気もちの落とし穴で、畏みたくないから、やすやすと畏にはまつてしまつてはいけない。いい人ぶるのは、いやだ。おばあちゃんの前アスパラは立つていた。

アスパラを助手席にすわらせて、わたしは後ろの席に移つた。アスパラの髪、寝ぐせがついている。パパはだまつて運転している。

「どこに行くの？」とわたしがたずねても、「うん」と言つたきりで、でも迷っているふうでもなくて、交差点を才れたり、つぎは曲がらずに直進したりして、どこかに向かつて運転をつづけている。

「子猫、もらつてくれる人がいてよかったね」

わたしが言つと、アスパラは顔を半分だけこちらに向け、わたしを見た。その目がくりんと丸くてかわいい。

「猫をもらつてくださいつて、いろんな人に頼むのは、いやじゃなかった？」

「うーん」と、アスパラは頭をシートにもたせかけた。それから「でもね」と、また顔を半分こつちに向けて、わたしを見た。

「猫の気もちつて、わかんないでしょ」とアスパラは言つた。「猫を見た人はみんな、かわいいね、とか言うんだ。でも、もしかしたら、猫はそんなことをいちいち言われるのは迷惑かもしれないよ」

アスパラは前を向いて言つた。空のほうを見ている。

「だよ」

アスパラの言葉がなんか胸に「C」。

パパは工場地帯を抜けたあと、海沿いの道を走つて、防波堤のそばに車を止めた。車からおりて、コンクリートの防波堤の切れ目から砂浜におりる。

工場地帯の煙突や工場が見える。白い煙が何本も空にのぼっている。陽ざしがきらきら海にハンシヤして、なんか海に負けてしまふような気がする。自分がばかな小学生のような気がする。海よ、おまえはそんなに偉いのか、と心の中で言つてみる。

アスパラが砂の上に、かちんかちんになった鳥の死骸を見つけている。⑧ どうしてアスパラはそういうものを見つつけちゃうんだろ

う。「ウミウだな」と、パパがそばでアスパラに言っている。

離れたところに犬を散歩させている人がいる。ハナ¹²されている犬はなんという種類かわからないけれど、あまりかつこよくない。砂浜をよたよた歩いているし。太っているし。

飼い主のおじさんは犬のことを忘れたみたいで、一人でむこうへ歩いていく。煙草^{たばこ}を吸いながら。犬も、おじさんと来たことを忘れたみたいな顔で砂をほじくりかえしはじめた。それからしだいにイキオ¹³いづいて、鼻を砂だらけにして、砂をばっばと掘っている。

パパがわたしを呼んだ。

走ってパパのそばに行き「なに？」とたずねると、

「昼ごはん、何を食いたい？」とパパは聞いた。

わたしは、犬のほうへそろそろと近づいているアスバラのところに行つて、「昼ごはん、何が食いたい？」と聞いた。

アスバラはうーんと空を見て目を細め、空を見たまま「ぼくねえ、回転寿司^{ずし}」と言った。

アスバラは卵の皿ばかりに手をのびした。

「なんで卵ばかり？」とわたしは聞いた。わたしは自分が取ったイクラやウニやアナゴの皿から「食べなよ」と、一つをアスバラの皿に移してあげた。

「えー」と、そのたびに困つたように口の中で言つてから、アスバラは箸^{はし}で 5 と寿司^{ずし}をつまみ、口に運んだ。食べ終わると、「うん、おいしい」と言った。

アスバラはにこにこわらった。

「いいんだよ。卵がそんなに好きなら、卵ばかり食べたつていいんだよ。そこが回転寿司のいいところなんだから」

パパは、アスバラの前に卵がのつていた皿が重なつていくのを面白^{おもしろ}そうに眺めながら言った。

アスバラはまた卵の皿を取り、それを食べ終わると、メロンを食べた。それから鶏^{にわとり}のから揚げを取り、プリンでしめくくつた。

「あー、とってもおいしかった」

アスバラはパパに言つて、首をぐるつとまわし、へへつとわらった。

わたしたち三人はきつと親子に見えているだろうな、とわたしは思った。アスバラ、うちの子になればいいのに、とまた思った。アスバラはいい子だし。アスバラ、怒^{おこ}つたことがないし。そう思つてから、あれつと思った。アスバラはどうして怒らないんだろう。いつもわらっている。だれにでもわらっている。

いまもわたしと目が合うと、わたしがわらうより先に、アスバラはわらった。アスバラ、いつもわらっている。なんで？

「行こうか」

パパが席を立った。

来週の日曜日も、三人でどつかへ行こうよ。わたしは、帰りの車の中でパパに言った。

「冬くん。行つてみたいところがあるの？」

パパは助手席のアスバラに聞く。

えー。アスバラは頭を右に左にうごかす。後ろからは見えないけれど、きつとアスバラはへらへらわらっているにちがいない。

「動物園に行きたい」とわたしは言った。

「動物園ね」パパが言う。「冬くんはどう？」

うーん。アスバラの頭がまた右に左にうごく。

「釣りなんてのはどうだ」

パパがアスバラに聞く。

「うん」

アスパラがうなずく。

アスパラ、ほんとは動物園に行きたいんじゃないのかな、とわたしは思う。パパに合わせて、うんって返事したんじゃないのかな。そういう子だもん、アスパラって。

「よし。じゃ、釣りに行こうぜ。そのかわり、朝早く出発するんだぞ」

パパは前を向いたまま言った。

「ママにおペン¹⁴トウを作ってもらおうか」とわたしは言った。

アスパラが顔を半分だけこっちにに向けた。わたしを見ている。くりんとした目がわらっている。

でも、アスパラと一緒に釣りに行くことはできなかった。

その週の木曜日に、おばあちゃんの家におばさん、つまりアスパラのお母さんがやってきて、アスパラを連れていってしまったのだ。

「あたしや、腹が立ってね。自分勝手もいいかげんにしてちょうだいって、言っちゃったの」

ママに向かって、おばあちゃんが言った。

わたしはアスパラが持っていくのを忘れたらしい猫のぬいぐるみを机の下に見つけていた。

おばさんは今、バーで働いているのだそう^⑩だ。アパートも借りているのだそう^⑩だ。自分の車を運転してアスパラを迎えに来たのだそう^⑩だ。アスパラはよろこんで車に乗り込み、おばあちゃんに「さよなら」と手を振ったのだそう^⑩だ。

アスパラ、きつとこんど暮らすことになるアパートにもすぐになじむだろうな、と思う。新しい学校にも、きつとなじむ。新しい学校の友だちとも仲良しになるだろう。

アスパラは迎えに来てくれたお母さんをにこにこ顔で迎えて、にこにこ顔でおばあちゃんに「さよなら」を言ったと思う。そうに決まっている。わたしにはわかる。だってアスパラは、にこにこする以外の方法を知らないんだから。「にこにこ」に、アスパ

ラのぜんぶの気もちが入ってるんだから。

そんなことを考えながら猫のぬいぐるみをなでいたら、突然、涙がでてきた。

アスパラはぜったい泣かなかった。

でも、アスパラもそのうち、わたしと同じ五年生くらいになったら、悲しいことで泣けるようになる、と思う。自分のことで泣けるようになる、と思う。

わたしはアスパラに大きくなってほしくない。大きくなると、きつと泣くぞ、と思う。悲しみがわかつちゃうぞ、と思う。

おばあちゃんとママはまだ話しこんでいる。

わたしはぬいぐるみを抱いて、マドの外を見た。

風が吹いているのがわかる。道のむこうのほうに並んでいる交通安全の幟^{のぼり}がばたばたはためいている。よその家の軒下^{のきした}に干された洗濯物がゆれている。

空を見あげると、かたまりになった雲が浮かんでいた。雲はゆつくりと流れていく。

アスパラが泣くとき、わたしはそばにいてあげたい、と思う。そこがどこであっても、アスパラのそばに飛んでいってあげたい、と思う。わたし、ぜったいそうする。わたしはアスパラを守りたい。何からかははっきりしないけれど、アスパラが泣いてしまつようなことから守りたい。

守る。

雲を見ながら、わたしは自分に約束した。

問1 線部1～15のカタカナの部分の漢字で書きなさい。

問2 1 5 にあてはまることばとして最も適切なものを次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

ア あつさり イ しげしげ ウ とうとう エ おずおず オ だんだん

問3 「 A 」「 B 」「 C 」にあてはまることばとして最も適切なものを次の中からそれぞれ一つ選んで記号で答えなさい。

A 「油の上に手を」 A 「」(5ページ)

ア こまねいて
イ かざして
ウ 焼いて
エ つけて
オ 加えて

B 「耳を」 B 「」(6ページ)

ア 疑い
イ 傾け
ウ 貸し
エ おおい
オ そろえ

C 「胸に」 C 「」(9ページ)

ア 余る
イ 秘める
ウ 刻む
エ 納める
オ しみる

問4 線部①「大人の考えていることはわからない」(3ページ)とありますが、「わたし」は誰のどういう行為が理解できないのですか。三十字以内で説明しなさい。

問5 線部②「大人の考えていることは、ほんとわからない。」(4ページ)とありますが、「わたし」がこのように感じた理由の説明として、最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア おじいちゃんは、庭に穴を掘られて困ったはずなのにアスパラを叱ることもせず、雑草を捨てることでその穴を役立てたから。

イ おじいちゃんが、いくら掘っても宝が見つからないアスパラを気の毒に思い、宝の代わりに雑草をたくさん穴に入れてあげたから。

ウ おじいちゃんは、冷たい言い方でアスパラに宝探しをやめさせたが、後で掘られた穴を雑草を捨てる場所として活用してあげたから。

エ おじいちゃんが、アスパラが宝探しを続けたがっていることに気づかないふりをして、雑草を捨て強引に宝探しをやめさせたから。

オ おじいちゃんが宝物を求めているアスパラの気持ちもおかまいなしに、アスパラの掘った穴を雑草を捨てる場所利用したから。

問6 — 線部③「わたし、すごいいいお姉さんになる自信がある。」(6ページ)とありますが、「わたし」がどのように思うのはなぜですか。二十五字以内で説明しなさい。

問7 — 線部④「ね、わかるでしょ、という顔をわたしに向けた。」(6ページ)とありますが、この時の「ママ」の気持ちを五十字以内で説明しなさい。

問8 — 線部⑤「ママはまるでいいお話を聞いて胸が熱くなりました、みたいな言い方をした。」(7ページ)、——線部⑥「悲しい、とわたしは思った。」(7ページ)とありますが、「ママ」と「わたし」は、それぞれアスパラが子猫の飼い主をさがした理由についてどのように考えていますか。違いがわかるように七十字以内で説明しなさい。

問9 — 線部⑦「気もちの落とし穴」(8ページ)とありますが、それはどういうものですか。それを具体的に示した三十五字以内の部分本文から探し、初めと終わりの七字を抜き出して答えなさい。

問10 — 線部⑧「どうしてアスパラはそういうものを見つけちゃうんだろう。」(9ページ)とありますが、「そういうもの」にあてはまるものを「鳥の死骸」以外に本文中からもう一つさがして答えなさい。

問11 — 線部⑨「きつとアスパラはへらへらわらっているにちがいない。」(11ページ)とありますが、「わたし」がこのように考えた理由の説明として、最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 三人でいると、お母さんが自分を残して出てしまったつらさをアスパラが感じずにいられるだろうと思ったから。
 イ アスパラがいつもやるようにパパの顔をうかがって、自分の気持ちを言わないようにしているのだろうと思ったから。
 ウ 家族で旅行などしたことがないアスパラは、突然どこに行きたいかをたずねられてもまどうだけだろうと思ったから。
 エ アスパラは子どもなので、様々などころへ連れていってもらえるうれしさをわかりやすく表現するだろうと思ったから。
 オ 両親の優しさにふれる機会のないアスパラは、親子のように話しかけられるのを照れくさく感じるだろうと思ったから。

問12 — 線部⑩「ゝのだそうだ」(12ページ・四か所)とありますが、この表現に対する説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア たった今事態が終了した^{しめつりよう}こととして繰り返し表現することで、利香もその現場にいたような臨場感を表現している。
 イ 既に終わってしまった^{すで}こととして表現することで、アスパラの無力さと自分のうかつさに対する利香の怒りを表している。
 ウ すべてが終了してしまった^{いまだ}こととして表現することで、アスパラのお母さんの身勝手さに対する利香の強い憤りを示している。
 エ すべて伝え聞いたこととして繰り返し表現することで、予想外の出来事に対する子どもの利香の無力さを示している。
 オ まったく同じ文末表現を繰り返すことで、物事に動じず環境の変化にすぐに適応できるアスパラの性格を暗示している。

問13 — 線部⑪「何からかはつきりしないけれど、アスパラが泣いてしまうようなことから守りたい。」(13ページ)とありますが、このように言っている「わたし」の気持ちを百字以上百二十字以内で説明しなさい。

平成二十七年 度

注意：『、』『。』『』『』『』『』『も一字に数えます。

受 験 番 号	
国	語

問 1		
11	6	1
12	7	2
13	8	3
14	9	4
15	10	5

問 2	1
	2
	3
	4
	5

問 3	A	B	C
-----	---	---	---

問 4

問
5

問 6

問
7

問
8

[illegible]

問 10

問 11

問
13

(二十字×十行)

【下書き用紙】

この用紙は自由に使つてかまいません。終わつたら問題用紙とともに持ち帰つてください。

A blank sheet of graph paper featuring a uniform grid of small squares. The grid is composed of solid black lines forming the outer border and dashed black lines for internal divisions. A single vertical solid line runs down the center of the page, creating two equal-width columns. There are 20 rows in total, each divided by a horizontal dashed line. This layout is typical for technical drawing or engineering sketching.

(二十字×十行)